

第19回(平成25年度)

「水にかかわる生活意識調査」結果レポート

＝家庭でよく飲む水は「水道水」でも、“そのまま”では飲まない＝

ミツカン水の文化センター(事務局:東京都中央区新川1-22-15茅場町中埜ビル 株式会社ミツカングループ本社内)では、本年6月中旬に、東京圏、大阪圏、中京圏の在住者1,500名を対象に、平成25年度「水にかかわる生活意識調査」を実施し、このほど集計結果がまとまりました。

今回は、これまでの調査内容に加え、“飲用としての水道水”に着目し、家庭における水道水の飲用実態を明らかにするための試みとして、「家庭で飲む水」や「水道水の飲用方法」、「飲み水としての評価」について新たに調査を行いました。

「水にかかわる生活意識調査」は、センター設立に先立ち、1995年に第1回目を実施して以来、ほぼ同じ内容で毎年6月に行っており、今回が19回目になります。日常生活と水とのかかわりや意識、水と文化などについてアンケート形式で調べることにより、生活者の実感としての水の諸相を明らかにしようというものです。(調査データおよび数表データは、別途HPで紹介しています。)

《今回の3大トピックス》

【1】家庭における水道水の飲用実態と評価は？

- …飲用としての水道水評価は、10点満点中6.83点
- …3人に2人が家庭で飲むメインウォーターは「水道水」
- …水道水を“そのまま”で飲まない人、6割超

【2】水不足への不安が増大

- …不安を感じる水の災害で「水不足」を挙げた人が昨年比6.4ポイント上昇
- …水のありがたさを感じるシーンでは、「渇水などによる給水制限のとき」が1位に

【3】水の備えに対する意識低下

- …災害時に対する水の備えを“何もしていない”人が約4割に増加

【この件に関するお問い合わせ先】

ミツカン水の文化センター 事務局

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15茅場町中埜ビル

株式会社ミツカングループ本社内

TEL.03-3555-2607 FAX.03-3297-8578 <http://www.mizu.gr.jp>

* 第1回(1995年)～第18回(2012年)「水にかかわる生活意識調査」の集計概要は、上記HPで紹介しています。

《結果の抜粋と掲載ページ》

■調査概要	2ページ
■水道水に関する意識／東京・大阪・中京圏	
【水道水への評価】	
◇水道水の評価は10点満点中7.05点	3ページ
◇飲用としての水道水の評価は10点満点中6.83点	3ページ
◇水道水への不満、「特にない」が4割超 「料金が高い」「おいしくない」は減少傾向	4ページ
【水道水の飲用実態】	
◇ふだん家庭で飲んでいる水は、約7割が「水道水」	4ページ
◇最も飲んでいる水は、2割超が「市販のボトルドウォーター」	4ページ
◇水道水の飲用方法、6割超が“そのまま”では飲まない 東京圏では「浄水器/整水器を通す」が最多	5ページ
◇飲用方法別の水道水の評価は、「そのまま飲む」人ほど高得点	5ページ
■水と災害／東京・大阪・中京圏	
◇不安に感じる水の災害トップ3は「台風」「水不足」「断水」	6ページ
◇半数近くが「給水制限」で水のありがたさを感じる	6ページ
◇災害時に対する水の備え、「何もしていない」人が増加	7ページ
■日常の水意識／東京・大阪・中京圏	
◇節水意識の世代間格差縮まらず…20代と60代で約20ポイント差	8ページ
◇水にかかわる経験・認知率が低下	8ページ

【調査概要】

第19回(平成25年度)「水にかかわる生活意識調査」

- ◆調査対象数 : 1,500票
- ◆調査対象者 : 東京圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)、大阪圏(大阪、兵庫、京都)、中京圏(愛知、三重、岐阜)に居住する20歳代から60歳代の男女
- ◆調査方法 : インターネット調査
- ◆調査期間 : 平成25年6月6日(木)～6月12日(水)
- ◆回収数(人) :

	東京圏		大阪圏		中京圏		合計		小計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
20代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
30代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
40代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
50代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
60代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
合計	250	250	250	250	250	250	750	750	1,500
	500		500		500				

参考 「ミツカン水の文化センター」と「水にかかわる生活意識調査」について

ミツカングループは1804年(文化元年)の創業以来、食酢の醸造を社業の中心としてきました。食酢の醸造に水は欠かせないものであり、ミツカングループは水の恩恵を受け、水によって育てられてきたと言っても過言ではありません。それだけに、ミツカングループの水に対する関心は創業当時から一貫して高いものでありました。

1999年1月に、「水の文化」に関するさまざまな研究や情報交流活動を推進していく母体として「ミツカン水の文化センター」を設立。センターを活動拠点に研究活動、機関誌「水の文化」の年3回の発行、ホームページでの情報提供、「使いながら守る水循環」を学ぶ市民参加型ワークショップ「里川文化塾」の実施など、様々な活動を行っています。「水にかかわる生活意識調査」も「ミツカン水の文化センター」の活動の一環として実施しているもので、研究事業の、そして一般生活者の啓発活動の基礎資料として有効活用していきます。

水道水に関する意識／東京・大阪・中京圏

【水道水への評価】

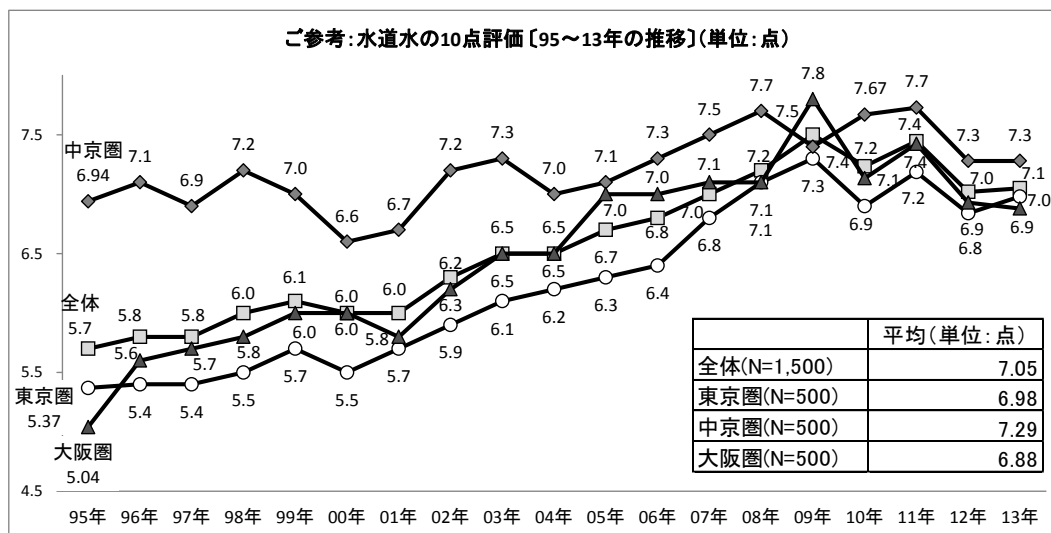
Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇全体の平均は7.05点

世界トップレベルの安全性を誇る日本の水道水は、どう評価されているのでしょうか？

10点満点で聞いたところ、全体の平均は7.05点で、1995年以降の右肩上がり傾向から一転してポイントを下げた昨年(7.02点)とほぼ同様の結果でした。

居住地別では中京圏が7.29点で昨年に続きトップ。昨年6.84点、6.93点と平均で7点台を割り込んだ東京圏と大阪圏は、今年もそれぞれ6.98点、6.88点でした。



*ご参考までに2012年までのデータを入れ込み、推移グラフとしました。

対象エリア：1995年…東京都、大阪府、愛知県、1996～2012年…東京圏(1都3県)、大阪圏(2府1県)、中京圏(3県)

有効回答数：1995～2009年…467～554、2010～2013年…1,500

Q.水道水を飲用水として10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

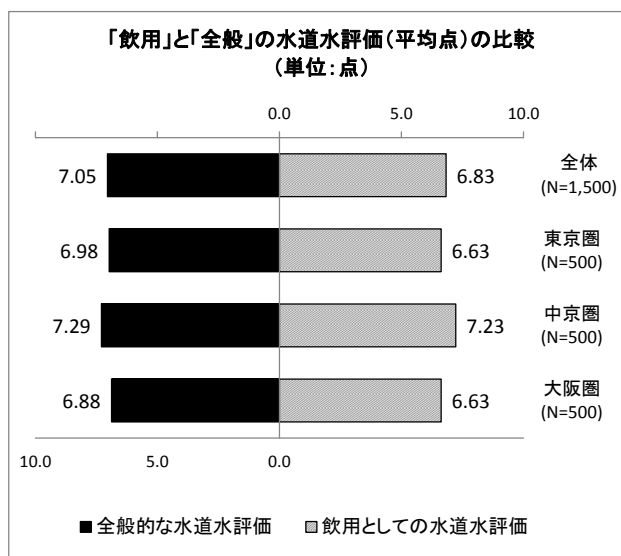
◇全体の平均は6.83点

飲用目的に限定した場合、水道水の評価に変化はあるのでしょうか？

前述の全般的な水道水評価と同様に10点満点で聞いたところ、全体の平均は6.83点となり、全般的な評価の平均(7.05点)より若干下がりましたが、居住地別で中京圏がトップ(7.23点)、東京圏(6.63点)と大阪圏(6.63点)の数値は差がないなど、傾向的には全般的な水道水への評価と変わりませんでした。

飲用としての水道水 10点評価(平均点)

	平均(単位：点)
全体(N=1,500)	6.83
東京圏(N=500)	6.63
中京圏(N=500)	7.23
大阪圏(N=500)	6.63



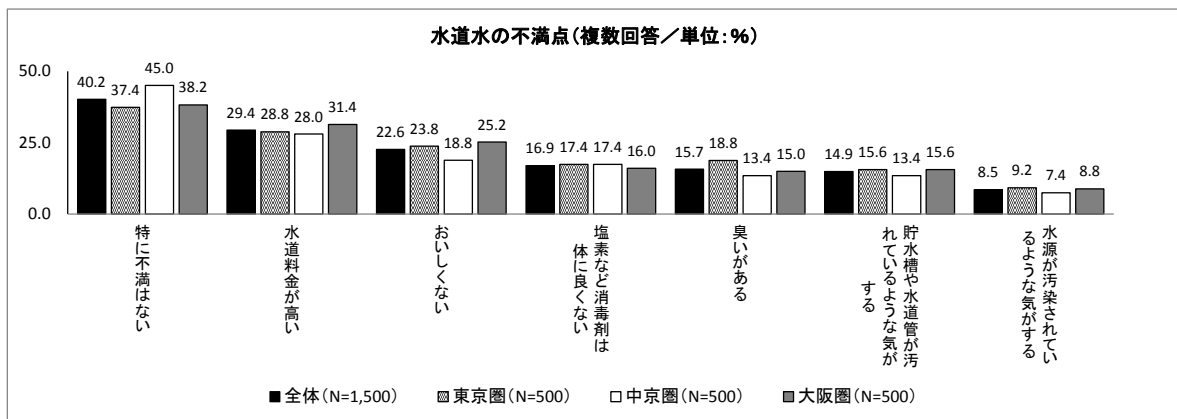
Q.水道水について不満を感じていることは？（8択＋その他＋特に不満はない）

◇水道水に一定の満足感か？ 4割超が「特に不満はない」

「料金が高い」「おいしくない」といった不満も、やや減少傾向

「水道水に対する不満」を聞いたところ、1位は「特に不満はない」（40.2%）で、全体の4割を超える回答があり、多くの人が水道水に一定の満足感を得ていることがうかがえました。

一方、「不満」の1位は「水道料金が高い」（29.4%）、「おいしくない」（22.6%）が2位と、昨年との順位の変動はなかったものの、いずれも一昨年（30.9%、24.1%）、昨年（30.3%、23.7%）から若干減少傾向にあり、それとは逆に「特に不満はない」は一昨年（36.9%）、昨年（37.6%）と徐々に増加し、今回（40.2%）、その傾向がより強まりました。



【水道水の飲用実態】

ミツカン水の文化センターでは、例年、水道水全般の評価を調査してまいりましたが、本調査より飲用水としての評価を明らかにするため、新たに「家庭における水道水の飲用実態・評価」について調査を行いました。ここでは、それらの結果を東京圏・大阪圏・中京圏の差異にも触れながら紹介します。

Q.ふだん家庭で飲んでいる水は？（5択＋その他＋水は飲まない）

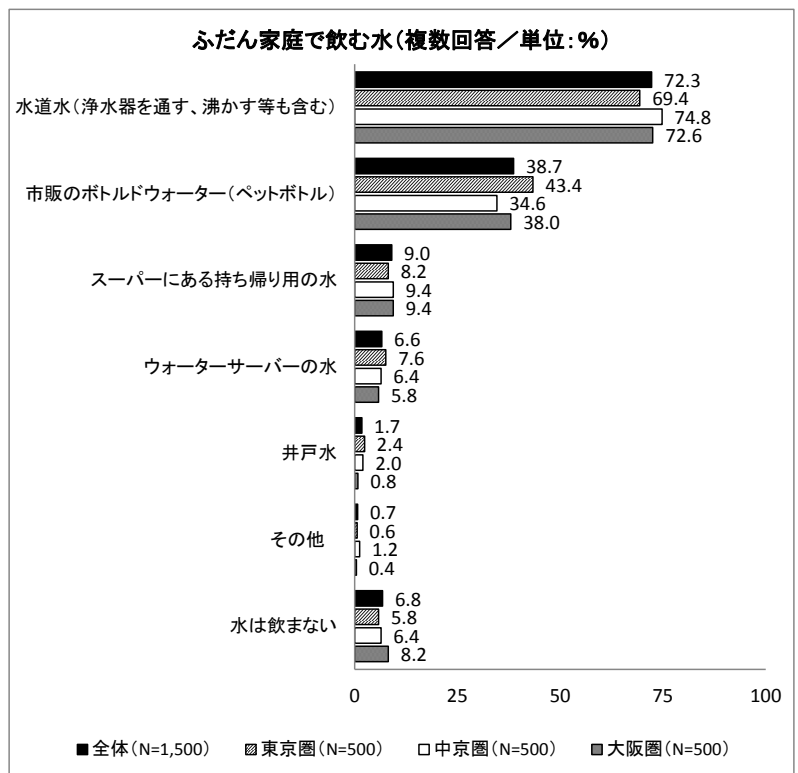
Q.ふだん家庭で最も飲んでいる水は？（5択＋その他）

◇「水道水」は約7割

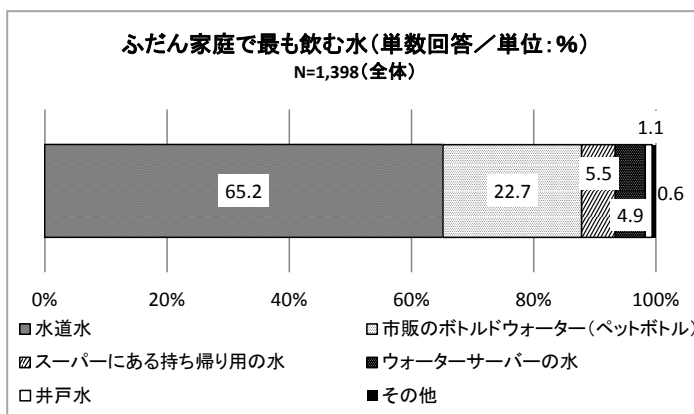
◇最も飲んでいる水は2割超が「市販のボトルドウォーター」

「水道水に対する不満」では、「おいしくない」が3位（不満の2位）でしたが、家庭ではどのような水が飲まれているのでしょうか？

結果は「水道水」（72.3%）がトップで、「市販のボトルドウォーター」（38.7%）がこれに続きました。居住地別も同様の順位でしたが、東京圏では「水道水」が7割を割り込み（69.4%）、「市販のボトルドウォーター」が4割を超える（43.4%）など、他のエリアに比べて「水道水」を飲まない傾向が色濃く出ました。



次に、「水は飲まない」人を除いて「最も家庭で飲んでいる水」を聞いたところ、1位「水道水」(65.2%)、2位「市販のボトルドウォーター」(22.7%)、3位「スーパーにある持ち帰りの水」(5.5%)、4位「ウォーターサーバーの水」(4.9%)、5位「井戸水」(1.1%)となり、約7割の人が家庭で飲むメインウォーターは「水道水」だった一方で、2割超の人が「市販のボトルドウォーター」を最も飲んでいることが明らかになりました。

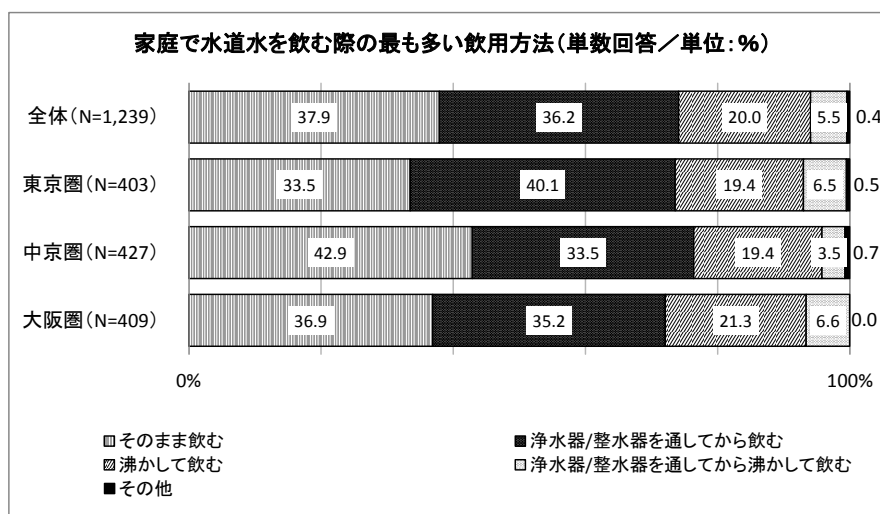


Q.家庭で水道水を飲む際の最も多い飲用方法は？ (4択+その他)

◇「そのまま飲む」がトップも、6割超が“そのまま”では飲まない

東京圏では「浄水器/整水器を通す」が最多

「水道水を飲む際の最も多い飲用方法」を聞いたところ、トップは「そのまま飲む」(37.9%)、2位「浄水器/整水器を通してから飲む」(36.2%)、3位「沸かして飲む」(20.0%)という結果でした。「そのまま飲む」は、順位こそ1位でしたが、2位「浄水器/整水器を通してから飲む」以下、「その他」(0.4%)までの合計62.1%、すなわち6割超の人が、水道水を“そのまま”では飲んでいないという実態が明らかになりました。なお、東京圏においては、「浄水器/整水器を通してから飲む」(40.1%)が「そのまま飲む」(33.5%)を上回って最多となり、前問「ふだん飲んでいる水」の結果も踏まえると、「水道水はあまり飲まず、飲む場合も“そのまま”では飲まない」という傾向がより顕著に表れました。



◇飲用としての水道水評価は、「そのまま飲む」人ほど高得点

3頁の「飲用としての水道水10点評価」を、上記の飲用方法別で見ると、「そのまま飲む人(37.9%)」の平均が7.59点、「何らか手を加えて飲む人(「浄水器を通して飲む」「沸かして飲む」「浄水器を通し、かつ沸かして飲む」「その他」の合計:62.1%)」の平均が6.81点、「水道水を飲まない人(全体の17.4%)」の平均が5.52点と、「そのまま飲む」人ほど高得点であることが浮き彫りとなりました。

飲用方法別の水道水 10 点評価(平均点)

	平均(単位:点)
全体(N=1,500)	6.83
そのまま飲む人(N=469)	7.59
手を加えて飲む人(N=770)	6.81
水道水は飲まない人(N=261)	5.52

水と災害／東京・大阪・中京圏

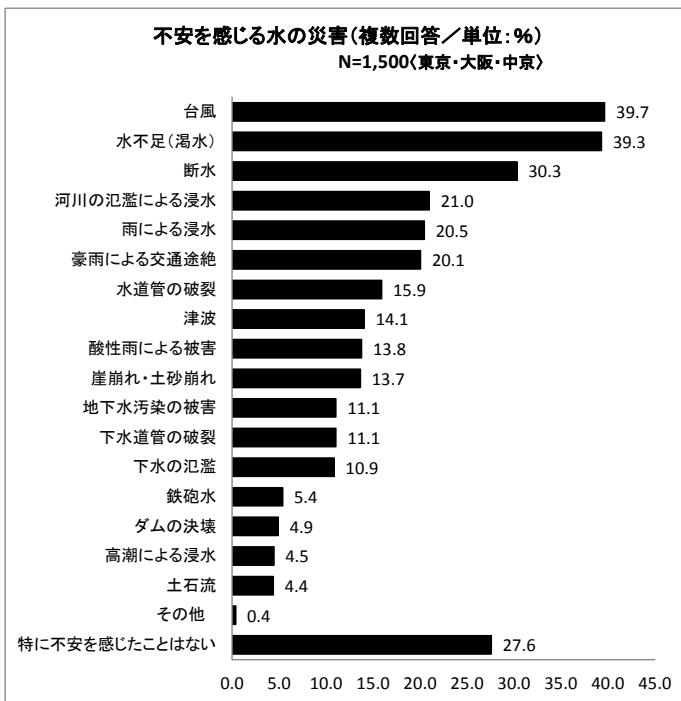
Q.不安を感じる水の災害は？（17択＋その他＋特に不安を感じたことはない）

◇全体のトップ3は「台風」「水不足」「断水」、東京圏では「水不足」が1位

◇大阪圏では「津波」を最も不安に感じる人が増加

「不安を感じる水の災害」について聞いたところ、1位「台風」(39.7%)、2位「水不足」(39.3%)、3位「断水」(30.3%)と、全体のトップ3は昨年と同様でしたが、その中で「水不足」は、昨年(32.9%)と比べて6.4ポイントアップし、1位の「台風」に0.4ポイント差(昨年は8.7ポイント差)まで迫った他、東京圏ではトップ(43.0%)となりました。「水不足」の数値上昇については、今年は入梅直後の少雨でダム貯水量が低下したことなどによる水不足への懸念に関する報道が影響したとも考えられます。

次に、「特に不安を感じたことはない」の回答者を除いた「最も不安を感じる水の災害」を聞いたところ、こちらも1位「台風」(21.5%)、2位「水不足」(21.3%)、3位「断水」(11.2%)がトップ3で、「水不足」の数値が昨年比8.6ポイント増と、全体の傾向は変わらなかったものの、中京圏では3位に「河川の氾濫」(14.1%)が入り(東京圏は5.8%で6位、大阪圏は7.7%で5位)、大阪圏では「津波」(9.4%・4位)の数値が昨年比で2.2ポイント上昇するなどの独色が見られました。大阪圏での「津波」の数値上昇は、大阪府による南海トラフ巨大地震における被害想定発表と、本調査時期が重なったことも要因の1つとして考えられそうです。



最も不安を感じる水の災害トップ5(単数回答/単位:%)

	東京圏(N=361)	中京圏(N=375)	大阪圏(N=350)
1位	水不足	台風	水不足
	26.2	25.1	21.6
2位	台風	水不足	台風
	19.1	16.0	20.3
3位	断水	河川の氾濫による浸水	断水
	13.0	14.1	10.9
4位	雨による浸水	断水	津波
	6.6	9.9	9.4
5位	津波	雨による浸水	河川の氾濫による浸水
	6.4	8.0	7.7

Q.水のありがたさを感じる時は？（10択＋その他＋感じることはない）

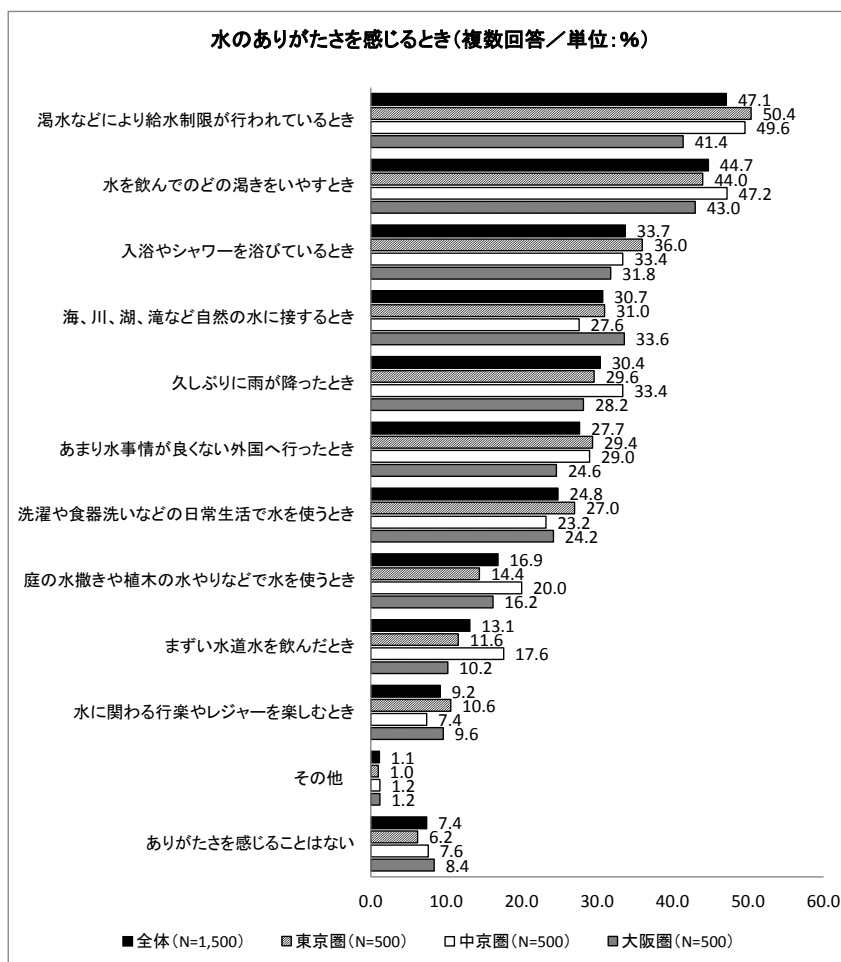
◇水不足による湯水への懸念が影響か？「給水制限のとき」が1位に

水のありがたさを感じるのは、どのような時なのでしょう？

「水のありがたさを感じる時」を聞いたところ、「給水制限が行われているとき」(昨年2位)が半数近くの回答(47.1%)を得て1位となり、前問の「不安を感じる水の災害」と同様、多くの人が水不足による湯水を懸念しているという心理が垣間見えました。

一方、昨年1位の「のどの渇きをいやすとき」は、9.6ポイント減の44.7%で2位に下がりました。本調査が実施された6月中旬は、昨年と比べて平均気温は高かったものの平均湿度が低く、昨年ほど蒸し暑くなかったことが結果に影響を及ぼしたのかもしれませんが。

また、居住地別では、大阪圏が1位「のどの渇きをいやすとき」(43.0%)、2位「給水制限が行われているとき」(41.4%)、3位「自然の水に接するとき」(33.6%)と、他のエリアと若干の違いがありました。



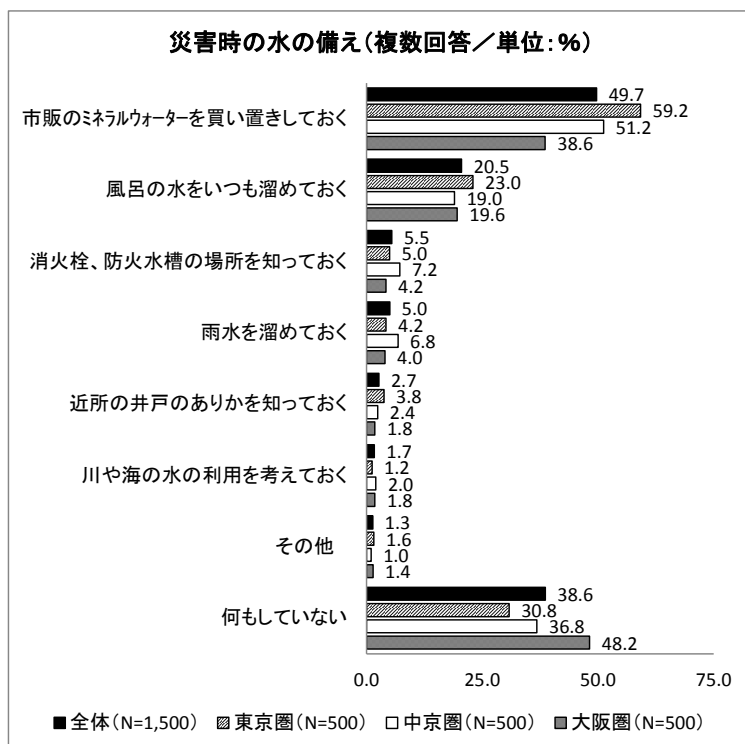
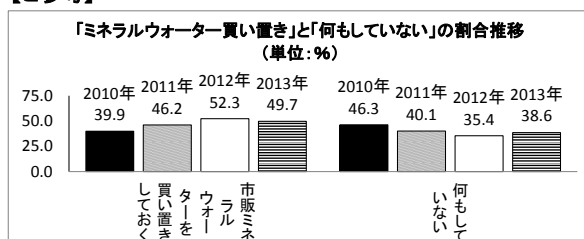
Q.災害時に対する水の備えは？ (6択+その他+何もしていない)

◇東日本大震災から2年経過で危機意識の薄れか？

“ミネラルウォーター買い置き”が減、“備えなし”が増

「災害時に対する普段の水の備え」は、ここ数年「ミネラルウォーターを買い置きしておく」人が増加傾向で、「何もしていない」人は減少傾向にありましたが、今回は「ミネラルウォーターを買い置きしておく」が昨年より2.6ポイント減の49.7%、「何もしていない」が3.2ポイント増の38.6%と、近年の傾向に反しました(下記【ご参考】参照)。特に東京圏では、「ミネラルウォーターの買い置き」(59.2%)、「風呂の水をためておく」(23.0%)が、それぞれ昨年より6.8、4.8ポイント減少し、「何もしていない」(30.8%)が6.8ポイント増加するなど、東日本大震災から2年余りが経過したことによる危機意識の薄れとも読み取れる結果となりました。

【ご参考】



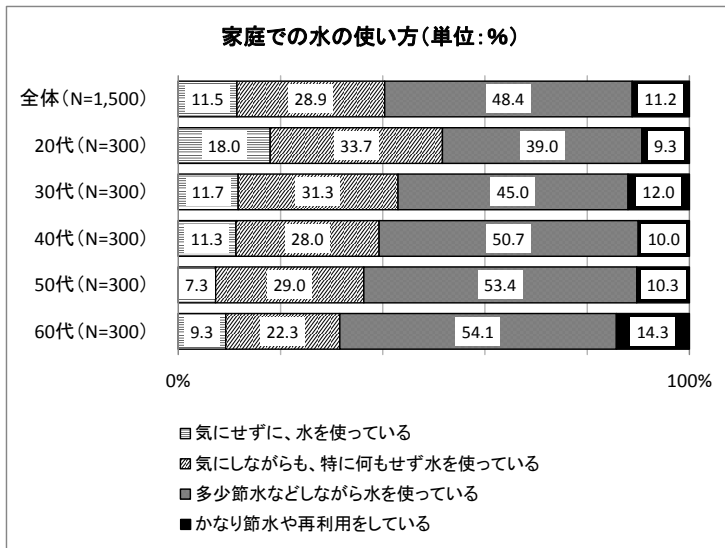
日常の水意識／東京・大阪・中京圏

Q.水の使い方は？ (4択)

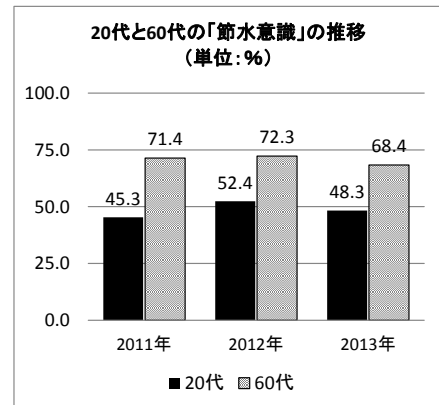
◇節水意識の世代間差縮まらず…20代と60代の差は20.1ポイント

「家庭での水の使い方」について聞いたところ、「節水している(「多少節水」+「かなり節水」)」は59.6%(昨年60.6%)、「気にせず使っている」と「気にしながらも何もせず」の合計は40.4%(昨年39.4%)で、昨年と大差ありませんでした。

年代別では、「節水している(「多少節水」+「かなり節水」)」の回答率が最も高かった60代は68.4%だったのに対し、最も低かった20代は48.3%と、20ポイント以上の開き(20.1ポイント差)がありました。この両世代は、2011年が26.1ポイント差(60代・71.4%、20代45.3%)、2012年が19.9ポイント差(60代・72.3%、20代52.4%)と、常に一定の開きがあることから、節水意識の世代間差は、そう簡単に縮まりそうにありません(下記【ご参考】参照)。



【ご参考】



Q.水にかかわることで知っていること、経験のあることは？ (5択+特にない)

◇水にかかわる経験・認知率が低下

水にかかわる事例を5つあげて経験・認知を聞いたところ、1位は「使っている水の水源地を知っている」(40.8%)、2位「特にない」(39.5%)、3位「利水施設や水道施設の見学」(29.1%)と続き、昨年から順位の変化はありませんでした。

ただ、数値に目を向けると、1位の「使っている水の水源地を知っている」が昨年比で2.5ポイント減(昨年43.3%→今回40.8%)、2位の「特にない」が4.0ポイント増(昨年35.5%→今回39.5%)と、水にかかわる経験・認知率の低下がうかがえ、中でも20代は、この傾向が顕著でした(水源地:4.3ポイント減、特にない:8.0ポイント増)。この要因については、関心度の低下と考えることもできますが、それとは別に、身近に水に関して体験できるような場がなくなってきているという現実があるのかもしれません。

